参加者による記録

2017年１月14日(土)

18：00～　事前学習会・結団式

事前学習会と懇親会を羽田空港国際線のロイヤルパークホテルザ羽田内で行った。

事前学習会では吉井会長が挨拶、自己紹介後、山岡事務局長がアジア連帯委員会の歴史、活動概要、訪問先について説明し、蛯谷さんから旅の注意事項等の説明があった。その後、訪問先での役割と団長、副団長を決め、挨拶者が訪問先へのお土産などを分担した。最初は緊張気味だったメンバーも懇親会での乾杯後には打ち解けたようだ。

事前学習会

ロイヤルパークホテルザ羽田の前で

その後、同じフロアにある羽田国際線カウンターでチェックイン。

2017年1月15日(日)

NH849　00：30　羽田発 → 05：45　タイ･バンコク

早朝､バンコクのスワナプーム国際空港に到着｡イミグレーションでタイへ入国手続き、荷物を受け取り、２階の出発ロビーのバンコクエアーのカウンターでチェックイン。手荷物検査、イミグレーションで出国手続きをした。空港内のレストランで１時間ほど事前学習会を行い、ビエンチャンに向け出発。

PG943　09：45　バンコク発
→ 11：00　ビエンチャン着

ビエンチャンのワッタイ国際空港では通訳（コーディネーター）のフンペンさんと合流し、市内のフランス植民地であった頃の建物を改装したホテルメルキュールにチェックイン。昼食はラオス麺レストランで。皆疲れも忘れにっこりしながら「美味しい」と。その後、タート・ルアン、パトゥーサイを視察。夕食はメコン河沿いホテル３階のベランダで。

ホテルメルキュールの前で

2017年１月16日(月)

９：30～　ターディンデンタイ村小学校

報告：奥信　明繁

ホテルを出発し、ＣＳＡ１９番目校であるターディンデンタイ村小学校に向かった。

道中は、市内から外れると道路がアスファルトから赤土に変わり、凹凸の酷い道をひたすら走り、２時間程度で到着した。

校舎は、建設後７年目ということもあり、比較的綺麗な状況であった。到着した私たちを、ソナ・サイセン校長（３７歳）をはじめ、先生方に出迎えていただき、職員室で意見交換を行うことになった。団を代表し和田さんの挨拶の後、意見交換を行った。意見交換の中では、小学校の生徒数などの実態や校舎が不足している状況について、報告を受けた。校舎が不足する背景は、綺麗な小学校がある村に人が集まる傾向があり、７年前の開校当初は充足していた教室が現在は不足し、職員室や屋外での授業を余儀なくされているとのことであった。また、教科書なども使い回しており、劣化が著しい状況であるとのことだった。

○家族数：２８３家族（子どもは１家族３～４名）
○生徒数：４０１名（男子２０６名、女子１９５名）
○クラス：１クラスは４０名程度
○教員数：１６名（男性８名、女性８名）
○ｽｹｼﾞｭｰﾙ：８時～１１時３０分、１３時３０分～１６時３０分
※　給食はなく、昼休憩（１１時３０分～１３時３０分）の間で、各自自宅に戻り昼食。
※　必要な生徒は１６時３０分～１７時３０分の間で補修授業を行っている。

校舎などの視察を終え、日本から持参した文房具やサッカーボールなどを寄贈した。

子どもたちとの交流は、「じゃんけんゲーム」、「学年別の男女ボール回し対決」、「学年別の男女綱引き対決」を行い、前日の夜に団員全員で入念な打ち合わせをしたので、子どもたちと笑顔のふれあいができた。言葉は通じなかったが、子どもたちや先生方と笑顔で交流でき、心は繋がっていると思った。

ターディンデンタイ村小学校（CSA寄贈校）

ボール回し学年別男女対決

14：00～　コンケオ村小学校

報告：奥信　明繁

午後は、ＣＳＡ３番目校であるコンケオ村小学校を訪問した。

コンケオ村小学校は１９９７年に、「連合愛のカンパ」、「基幹労連ふれあいカンパ」などを含めた支援により建設された。昨年のＣＳＡワーキング・スタディー・ツアーで本校の視察を行っており、その際に、「破損した屋根の補修」と「屋根材を波トタンからスレート瓦にしたい」との要望を受け、ＣＳＡとして５０万円の材料費を送った経過がある。

補修されたコンケオ村小学校の屋根

今回の視察では、屋根・天井・壁の補修状況について、確認を行った。

屋根は、グリーンのスレート瓦に補修されており、天井は白いベニア板で補修されていた。校舎の壁は、現時点では補修されていなかったが、今後、補修を行うとの説明を受けた。

コンケオ村小学校への衣類の引き渡し

その後、ラオス保健省から送られた救援衣類５０箱を小学校と村に寄贈し、喜んでいただいた。

引き続き、子どもたちと「じゃんけんゲーム」と「学年別の男女ボール回し対決」を行い、団長が日本から持参した音色の良いホイッスルにあわせて、楽しく交流を行えた。

最後に、記念写真を撮影する際、新聞紙で作った兜を子どもたちにプレゼントし、心に残る写真を撮影することできた。

18：30～　サンティパープ高校生寮卒寮生との交流

報告：青柳　久子

夕方から、サンティパープ高校生寮の卒寮生との交流会が、古くからＣＳＡを支援してきた佐古さんのお店で開催された。現在、この店を任されているエアさんもＣＳＡの活動を支えて下さっている。

卒寮生と

この日、集まった卒寮生は、大学在学中の学生と社会人のあわせ３５名。

まず、メンバーを代表して奥信さんから挨拶、続いて寮生代表として外務省に勤務するシーボンさんから歓迎の挨拶を受けた。その後は、各々が名刺を交換したり、片言の英語で歓談した。

私はエアさんやフンペンさんに通訳してもらいながら身振り手振りで交流した。最初に話をした女性達３人は外務省、労働省、国会議員の秘書として活躍されており、そのうち

２人の女性は結婚をされていた。共働きということなので、仕事と家事の両立についてラオスの事情を聞いてみたが、やはり仕事で帰りが遅くなる時もあるとのことであった。議員秘書の方は「地方への出張も多く、家事も大変だ」、と身振り手振りで話してくれた。

席替えがあって、次に移った席は、国立大学の学生さんたちの席だった。環境分野を勉強中で将来はエンジニアを志望している学生、建築を勉強中の学生さんなど、目を輝かしながら将来の夢を語っていた。

全員優秀な方々ばかりで、これからのラオスを動かす中心メンバーになっていくのだと思うと、ＣＳＡの活動は本当に素晴らしいものだと思った。

最後に、卒業年度が古い順に、全員の方が自己紹介をした。皆さんロ々に「自分が今あるのはＣＳＡのお陰です」と述べ、そして私たちメンバーの一人ひとりにラオスの記念品を渡し、感謝の気持ちを示した。私たちもそれぞれ持参したグッズ等を代表から手渡した後、全員笑顔で記念撮影をして交流会を終えた。

2017年1月17日(火)

８：30～　ラオス教育スポーツ省　初等教育局

報告：青柳　久子

ラオス教育スポーツ省にミトン初等教育局長を訪ねた。名頭薗団長より挨拶し、前日の小学校訪問等の報告をした。ミトン局長から「ＣＳＡには多くの学校を寄贈していただいているので、大変感謝している。特に２４番目校であるファサン村小学校（基幹労連寄贈校）はラオスで一番きれいだと大変喜んでいる」とお礼の言葉をいただいた。

ラオス教育スポーツ省初等教育局で

その後、メンバーから「先生になる資格」、「先生のレベルをあげるための工夫」、「校長先生の年齢制限」、「学校の数」などについて質問をした。これに対し、局長は「ラオス政府は教育が何よりも重要なので非常に力を入れているが、課題がたくさんある。学校は今８，０００校くらいあるが、そのうち７０％はまあまあ良い学校だが、３０％は設備が整っていない。また村が開発されると人口が急激に増加して生徒の数も急激に増え、教室や先生の数が足りなくなる。町に近い所は先生も行きたがるが、遠い所へは行きたがらない。先生の給料を高くしたり、大学で町に出てきた学生には、なるべく地元の村に戻って先生になってもらうように働きかけもしている。先生のレベルを上げるための研修なども行っており、政府としても努力はしているが、先生の数も足りないし、レベルも、まだまだだ」と厳しい現状について説明した。

さらに、「教科書も衣類も非常に不足しているので、貧しい子どもたちに教科書を配布する時に衣類も一緒に配布したいと思っている。ＣＳＡから保健省に送っている中古衣類のうち、２コンテナ分ほど教育省に分けてもらえないか」との要請があった。山岡事務局長は、「これから保健省との意見交換の場があるので、要請内容を伝える」と応えた。

メンバーは、ミトン局長から切実な要請を受け、ＣＳＡの活動の重要性を改めて認識した訪問となった。

９：00～　ラオス教育スポーツ省　中高等教育局

報告：和田　諭

ラオス教育スポーツ省中高等局で

シソウク局長を訪問した。当方より活動報告、とりわけ高校生寮の補修状況等について説明した。局長より、「ＣＳＡの活動は大変素晴らしく、ラオスの貧しい人々の助けとなり、非常にありがたい。政府予算が十分ではなく、寮がないと将来が開けなかった。遠い村からの通学時には、通学路の橋が決壊し、子どもがなくなったことがある。今後も引き続き宜しくお願いしたい」との話があった。また、ラオス南部でも、困窮している地域は複数あり、また物理や化学の実習もできない等、地域，教育レベルには、まだまだ課題が多いといった現状についてもお話し頂いた。

最後に、局長は「南部には高校生寮がないのでＣＳＡにつくってほしい」と要請したが、山岡事務局長は「難しいが、持ちかえりたい」と応えた。

11：00～　在ラオス日本大使館

報告：吉野　雅彦

在ラオス日本大使館で

泉さんから代表挨拶を行なった後、林田二等書記官よりラオスの概要を説明頂いた。林田書記官は保健と教育分野を担当し「草の根無償奨学金制度」にも精通されており、ＣＳＡの活動にも理解と高い評価を頂いた。

（ラオスの特徴について）

◆　社会主義体制下で市場経済化を推進するも、資本は首都圏に集中している

◆　周辺をアジアの大国に囲まれた小国ゆえにベトナム・タイ・中国との「気遣い」の中で「バランス外交」を図っている

◆　ＯＤＡ額は日本がトップだが、直接投資で中国が抜きん出ている

その後の質疑応答では主に日本との関係性について行われた。（以下代表例）

Ｑ：外交の観点と海外協力の観点は違うが、日本はどう見られているのか？

Ａ：日本はＡＳＥＡＮにおいても重要国であり、ラオスは安保理においても、日本の常任理事国入りを含め日本の立場を一貫して支持している。
また内陸国にも拘わらず国際捕鯨委員会に加盟して日本を支持している。

Ｑ：直接投資（国を介さず法人・個人の投資）が多い中国については？

Ａ：ラオスは周辺国や「国を助けてくれる国」の方を重要視している。

Ｑ：日本企業進出が著しいラオスの魅力はどのような点か？

Ａ：政治的安定性と良好な治安、安定した電力（水力発電）、安価でかつ勤勉な国民性（労働力）、税制上の優遇措置が挙げられる。

日本国から見たラオスとの国交について、深く理解する有益な訪問となった。

12：00～　ラオス保健省との意見交換

報告：吉野　雅彦

ラオス保健省との意見交換

浅山さんから代表挨拶を行なった後、ソムチット副官房長から「ラオス国民への衣類の送付に対し、感謝の気持ちを日本の皆さんにも是非お伝え頂きたい。昨年頂いた分を地方に送ったが、まだまだ足りないとの声もあるので、これからも宜しくお願いします」との謝辞を頂いた。

その後、主に衣類の分配や送付方法についての説明があった。さらに「保健省の職員は５４名（うち女性２４名）であり、保健省のスタッフは直接現地へ行くことはないが、倉庫の管理などの間接業務に関与している。倉庫から発送するほか、医療スタッフが村へ診察に行く時や予防接種で学校に赴く時に衣類を直接持っていく場合もある」との説明があった。

ここで、山岡事務局長から、「午前中に訪問したミトン初等教育局長より『救援衣類を保健省だけでなく教育省にも回して欲しい、教科書を小学校に届ける際に救援衣類も持参すれば効率的に児童に支援が行き渡る』との要請があった」旨を伝えると、ソムチット副官房長官は、「目的が同じなので省庁の違いにはこだわらない、ＣＳＡが承知していればすぐ対応する」と述べた。メンバーは、その場で要請に対する回答を引き出すことができ、単なる意見交換以上の大きな成果を出すことが出来た。

14：00～　ラオス保健省衣類保管倉庫

報告：名頭薗　由希雄

ラオス衣類保管倉庫で意見交換

ラオス保健省の衣類保管倉庫を視察し、ソムチット副官房長官他、カンケオ倉庫担当者と意見交換した。ＣＳＡがラオス保健省に送った３，２０６箱の内１，０００箱が、すでに北部の寒い地方に送られていた。「大部分の衣類は大きなビニール袋に入っているので濡れないで助かる」との報告を受けた。

倉庫前で衣類の引渡し式を行った。チームメンバーは自分の組織から送った箱を見つけ写真を撮ったり、カンケオ倉庫責任者から、衣類の配布状況について説明を受けた。

今後も中古衣類・海外輸送費カンパを積極的に支援していきたいと思った。

ラオス衣類保管倉庫で引き渡し式

15：00～　ラオス地雷博物館

報告：浅山　哲也

地雷博物館で

ビエンチャン市内にある「ラオス地雷博物館（ＣＯＰＯ）」訪れた。

ラオスは、１９６２年～１９７３年に行われたベトナム戦争時、北ベトナム軍が南へ移動するための空路として使われていた。そのルートを中心に、アメリカ軍が２００万トンもの爆弾を投下した。特に、クラスター爆弾というテニスボールのような形状の不発弾は、２７０万個投下されたと言われており、そのうち不発弾として残った爆弾は約３０％といわれている。投下された地域はわかっているが、ラオスの地図でいうと右半分が赤く示されていた。その爆弾によってどんな被害がおこっているのか、ビデオでも紹介されていた。

人々が生活する中で畑を耕している際に鍬で刺激を与えて爆発したり、地面で料理のため火を起こした際の熱で爆発したり、子どもが投げて遊んでいる際の衝撃で爆発したりと、年間４００名程度の犠牲者が出ており、そのうち４０％が子ども。爆弾がすべて撤去できるまでに、あと１００年以上はかかるといわれている。

一方で、爆発処理できた不発弾の鉄を利用し、生活するための道具（ランプ・フライパンなど）やルアンプラバン市の宿泊施設の看板で利用していることがわかった。ひとつの戒めであると私は感じた。

爆発の被害で命を失う者いれば、手足が吹き飛び生活に支障がでる者もいる。そのため、生活を行う際に義足をつけて生活する必要がでてくる。施設内には実際の義足展示もされていた。実際、団員のメンバーが義足体験をおこなっていたが、階段の上り体験をしていたが、義足具は非常に重く、自由に動かせるものではなかった。

私は、今回、ラオスの国の人々は非常に温和な性格でゆったりした生活感があることが感じ取れたが、その反面、地雷や不発弾に苦しんできた歴史があることもわかった。

戦争が終われば、すぐに平和が訪れるのではなく、不発弾という脅威が後世まで残ってしまう恐怖が続くことに憤りを感じた。

16：00～　難民を助ける会ラオス事務所

報告：名頭薗　由希雄

難民を助ける会で

難民を助ける会（ＡＡＲ・ＪＡＰＡＮ）のラオス事務所を訪問した。

岡山事務局長と大城プロジェクトコンダクターから説明を受けた。ＡＡＲは、日本で生まれた、政治・思想・宗教に偏らない国際ＮＧＯで、紛争や災害などの困難に直面した人々へ、「困ったときはお互いさま」の精神で直ちに支援を届けるとともに、誰もが生命や生活を脅かされることのない社会の実現を目指して活動されている。

１９７９年にインドシナ難民支援を目的に発足し、以来、活動地域や分野を広げながら６０を超える国・地域で支援を展開し現在は１７カ国で活動中とのこと。

ラオスでの具体的な活動についてもお聞きした。
１．車椅子の製造支援・普及支援事業
２．障がい者のためのバリアフリー環境促進及び就労支援事業
３．障がい者の小規模起業支援（ナマズ・カエル・コオロギの養殖等）
ラオス国民は現在も、ベトナム戦争時におけるアメリカ軍の空爆投下による不発弾で、多くの方々が被害に遭っており、継続した国際社会の支援やＡＡＲのようなＮＧＯの地道な支援活動の必要性を感じた。

2017年1月18日(水)

移動日
ＱＶ101　11：30　ビエンチャン発 → 12:15　ルアンプラバン着

午後は、ルアンプラバン市内の国立博物館、ワット・シェントーンを視察し、希望者は、市内を一望できるプーシーの丘に登った。
宿泊は、メコン河沿いの風情あるメコン・リバーサイドロッジ。

ラオス航空で移動

メコン・リバーサイドロッジ

2017年1月19日(木)

９：00～　ルアンプラバン県教育スポーツ省
報告：泉　利雄

ルアンプラバンの県教育スポーツ省前のグランドで高校生がセパタクロー（東南アジアで行われている球技。藤球ともいう）の練習をしている光景を横目に、私たち９名の団員は県教育スポーツ省へと足を運んだ。
部屋に入り、ＣＳＡを代表して中村さんの挨拶の後、ボンペット副局長より「ルアンプラバン県はサンティパープ高校の寮生が勉強を頑張ってくれたおかげで、有名な県になった。他の県からも沢山の人が視察に来るようになった。サンティパープ高校はとても良い高校。これも、ＣＳＡの支援のお陰であり、教育省を代表して心より御礼を申し上げます。他の国や自国の政府からの支援はまだ足りない状況なので、今後とも支援をいただきたい」との挨拶があった。また、「先日ベトナムの会議で、ベトナムに留学しているサンティパープ高校の卒寮生に会えたことはとても嬉しかった」と報告があった。
◆質疑応答
Ｑ．教育省として心掛けていることは？
⇒校長に対して、優秀な生徒になってもらうために頑張ってほしいとお願いしている。
現状は県全体の１２郡、２７校のうち、サンティパープ高校しか優秀な生徒は出てこ

ない。特にＣＳＡ寮の卒寮生は公務員や医者の道に進んでいる。（ここで、ＣＳＡの山岡事務局長よりサンティパープ高校の卒寮生との交流をしてきたことを報告）

ルアンプラバン県教育スポーツ省で

Ｑ．サンティパープ高校生寮に入寮する条件は？
⇒前提として中学校を卒業していることだが、第一に、成績が優秀かどうか、第二に、家庭が貧しいかどうか、第三に、まじめかどうか。中学校の校長の推薦があって、その中から県が選んで入寮させている。その結果、これまではビエンチャンの学生が優秀だったが、サンティパープ高校生寮が出来て、生徒だけではなく先生も頑張ったので、無名であったルアンプラバン県の学生の成績が優秀で有名になった。

Ｑ．他の高校には寮はあるのか？
⇒サンティパープ高校しか寮は無い。学校から離れた村の学生は、通うことが出来ないので、自分の小屋を作って１週間寝泊まりをしているので、高校の周辺は小さな小屋がたくさんある。ただ、女子学生はそれも大変なので親戚の家に泊まっている学生もいる。

質疑応答を終え、全員で記念撮影をしてルアンプラバン県教育省を出発し、サンティパープ高校に向かった。

９：40～　サンティパープ高校生寮

報告：中村　健志

メンバーがサンティパープ高校生寮の前に着き、車から降りると、寮生達や先生達が全員で左右一列に並び、暖かい拍手で出迎えてくれた。その後、寮内に案内され、我々の為に用意してくれた部屋に、先生方と寮生達が集まり、交流会が始まった。吉野さんの挨拶があり、その中でメンバーより、寮生達の食費の一部として２００ドルの寄贈が行われ、寮生達の大きな拍手と御礼の言葉をいただいた。

■寮監より報告

サンティパープ高校寮生は、現在男子７２名・女子１８名の計９０名が在籍し、ラオス北部の８県から集まっている。生活はかなり厳しいもので、自分達で掃除などの寮に関わる仕事も行っており、また授業以外にも先生や先輩に頼んで勉強を教えてもらっている。これから国の試験大会があり、生徒達はそれに向けて猛勉強をしている。

昨年とは違い、今年はスポーツ大会では５位と振るわなかったが、歌の大会では２位の成績を残したり、踊りでも結果をだしている生徒がいる。

普段から先生が懇切丁寧に生徒達に勉強を教え、ここの寮の習慣として、先輩になると後輩達に勉強を教えていることが続いている。

皆様の幸福と健康をお祈りします。日本に帰られてからも他のお世話になっている皆様にも感謝を伝えてほしい。

■校長先生より

この高校では生徒達がラオスの将来の経済発展のためにも、しっかり学んでいけるように指導を続けていく。寮生達は勉強だけでなく、日々の掃除等も同じくしっかりとやっていかなくてはならない。ここで掃除等を行うことは、日本の方々との友好を守り、支援を継続してもらう為にも必要なことだと考えている。

ＣＳＡから支援して頂いている予算は、しっかりと管理し、生徒達の食事など、極力不自由な思いをさせないように管理運営している。

生徒達も、努力することを忘れず、試験大会では「優秀賞」を取る学生もいて、非常に真剣に学んでいる。こうした生徒をもっと増やしていきたい。

（生徒達に対する数々の指導方針や想いを伝えていただいた。）

■寮生との質疑応答

Ｑ．　寮生活で、一番の楽しみは？

⇒センヤンさん　３年生（男性）：一番楽しいのは、たまにではあるけれど家族や友達に会えること。他にも、周りの寮生達と交流したり、時には助け合ったりすることができ、生活も楽しい。

Ｑ．　大変なことはたくさんあると思うが、何故ここで勉強をしたいのか？

⇒トンチョイさん　３年生（女性）：私の家庭はとても貧しく、本来であれば高校には行けなかったかもしれない。自分はまだ未熟なので、ここで頑張って勉強して少しでも家族の助けになりたい。ＣＳＡの援助がないと勉強する機会を得られなかったので、本当に感謝している。

Ｑ．　手を挙げて答えてください

・やりたい仕事はきまっているのか？　⇒　ほぼ全員
・海外でしごとをしてみたいか？　⇒　ほぼ全員
・ラオスの役人になりたい？　⇒　約半数
・先生になりたい？　⇒　１０名程

その後、ベトナム留学に行っていた卒寮生男子２名（ビラコーンさん、パッカイさん）から、留学についての感想や将来についての話をしてもらった後、ＣＳＡの送った衣類５０箱の引き渡し式を行った。ここでも暖かな拍手や感謝の言葉をいただき、我々も胸が熱くなった。

そして、我々を歓迎する儀式、バーシーセレモニーが行われた。祭壇を囲み、全員で輪を作りお祈りした後、寮生達が我々の手首に感謝の言葉や健康のお祈りをしながら一人ひとりにスーファン（ミサンガの様な物）を巻いていただいた。

また、儀式後には生徒達から、心のこもった歌や踊りの披露があり、我々も見よう見まねで生徒達と一緒に踊ることができた。お返しに、名頭薗団長を中心に、我々が生徒達にいくつかのゲームを紹介し、実際に一緒にやって交流を深めた。

高校生寮へ衣類引渡し

交流会終了後、寮の視察を行った。特に注意して視察しなくてはならなかったのが、前年度に課題として挙げられた天井の老朽化、壁等の塗装、全体の配線の安全化だったが、補修後を実際に確認してみると、非常に綺麗に改善されていていおり、その点については安堵することができた。

しかし、老朽化している部分が他のところにも見えたり、生徒達は一日に２食の食事しか取っていない等、予算に限りがある以上仕方のないことかもしれないが、まだ課題は残っていると感じた。

高校生寮の天井補修

ＰＧ９４６　17：40　ルアンプラバン発 → 19：20　バンコク着

チームメンバーは、フンペンさんとエアさんに別れを告げ、名残おしいラオスを後にバンコクに向かった。ルアンプラバンからバンコクに着くとネオンのきらびやかさやビルの多さに驚いた。

バンコクエアーで移動

2017年１月20日(金)

10：30～　タイ衣類引き渡し式

報告：中村　健志

タイ社会開発福祉省での中古衣類引渡し式

朝、打合せをした後、市内にあるタイ社会開発福祉省に赴いた。省内に入ると、目の前には６０～７０名程の職員の方とカメラマンや取材の方が待ち受けていたため、メンバーが驚く程の出迎えを受けた。

非常に豪華なステージも用意され、司会の挨拶を始まりに引渡し式が行われ、職員の方や社会福祉省副大臣からたくさんの御礼の言葉をいただいた。その他にも我々一人一人に対して記念品が贈呈されるなど、ＣＳＡの継続してきた支援の大きさを改めて実感した。

その中で、名頭薗団長からの挨拶があり、我々の総意である「今回送

った４，５０３箱の衣類を貧しい人達に一人でも多く届けてほしい」という想いを伝えた。
　また、マスコミの方が山岡事務局長とも質疑応答を行い、これからも継続して支援を続けていきたい旨を伝えることができた。
　式終了後、今後のタイ側の新しい担当者となるカイさんや衣類倉庫の作業責任者であるスティーさんや社会開発福祉省の職員の方との昼食会を行った。

マスコミ取材を受ける団長と事務局長

14：00～　タイ中古衣類保管倉庫

報告：浅山　哲也

　ラオスから飛行機で移動し、バンコク市内を見たときに、「こんなに経済発展している国に支援が必要なのか！？」疑問が浮かぶ。
　しかし、タイ社会開発福祉省のカイさんや、倉庫管理担当のスティーさんの以下のような説明によって必要性が理解できた。
　タイでは、それぞれ（女性・子ども・高齢者など）各省庁が役割をもっており、タイの中古衣類保管倉庫は、社会開発福祉省の管轄で運営されている。
　タイの中心であるバンコクを除く経済格差の大きい地域（田舎）に対し、中古衣類の配布を行っていることがわかった。
　倉庫の管理は通常２～３名のスタッフで管理しているが、多いときは８名体制となる。
　中古衣類は、タイの各県単位で要求を受けて、社会開発福祉省の判断のもと配布に至る。
　本年１月のタイ南部の洪水で被害を受けたスラタニ地域にも送っている。その他、他県からもさまざまな要求を受けている。

Ｑ　特にほしいものはありますか？
１）女性の下着。まず中古で売られていない
２）くつ　（※衣類コードではないので現実に難しい）
３）男性の服（シャツ・ズボン）北方は冬用も必要とされている（コート・ショートジャケット・ワイシャツ・フリース・ジャージなど）
４）タオル（使い道が幅広いため）
５）洋服に関しては、子ども・女性ものは意外と各県の要望にこたえられている

タイ衣類保管倉庫で

Ｑ　中古衣類の配布について
１）服は２枚一組で、ビニール袋に入れて渡している
２）男女・子どもは分けているが、それぞれ本当は服の上下でそろえたいが難しい
３）サイズはバラバラである（家族に渡すため）
４）各県には白い布袋で一まとめにして渡している（正月ごろは倉庫に陳列した中古衣類がいっぱいだったが、当日の倉庫はすでに配られ始めていたので棚に空きがあった）

５）特に男性の中古衣類が最初になくなっていた
６）毎年１０月までにはすべての中古衣類が配られる

こちらの中古衣類集約時の配慮として、昨年から衣類をダンボールに入れる際にビニールに入れるようにしたことは好評価であった。（雨に濡れても衣類が濡れないメリット）

Ｑ　タイ国内での支援はどうなのか

１）ＣＳＡからの中古衣類は９９％使える衣類だが、タイで集める中古衣類は使えるのは５０％以下であるため、仕分けが大変である
２）タイの方は、社会開発福祉省に直接寄付しに来るが、ボロボロになるまできているので正直渡せる状態ではない
３）ＣＳＡの中古衣類は、普通の方でも欲しいくらいの衣服が入っている

タイ衣類保管倉庫で意見交換

最後にＣＳＡが送ったダンボールを団員みんなで確認した。ＵＡゼンセンの加盟組合から届いているダンボールを確認し、感動した。

15：45～　在タイ日本大使館

報告：和田　諭

奥信さんから挨拶をした後、吉野二等書記官よりタイの概要について説明して頂いた。

国土は日本の約１．４倍で、人口は７千万人と日本の約半分。仏教徒がほとんどを占めるが、マレーシア国境付近は、イスラム教徒が多く、また独立運動が激しいため、テロ等の危険がある。貿易相手国は、中国・日本・アメリカで、中国の存在感が高まっている。

タイへの日系企業の進出が増加しており、日本人商工会議所の加盟企業は上海には劣るものの世界最大級の規模となっている。加盟企業のうち、製造業がほぼ半数であるが、近年サービス業の進出も増加している。日本人駐在員数は、約３．６万人と、国別では最多となっている。タイへの進出に際しては、「タイ＋１」として、タイを拠点に周辺国に事業展開するケースが多い。

都市構造は、バンコク一点集中で地方との貧富差が非常に大きい。産業構造は、農林水産業に従事する人口が最も多く、その他自営業・屋台・タクシー等と併せてインフォーマルワーカー労働者が６０％程度を占めている。

在タイ日本大使館の前で

タイ人は、優秀な人材は転職を重ねてキャリアアップする人が多く、日本企業がキャリアを磨くための場として利用されるケースもある。女性の就労状況は、女性就業率及び女性管理職率が高い。結婚や出産で退職する考えがないため、子どもを職場に連れてくる等、皆でバックアップできる体制が整っているとのこと。その背景には、物

価上昇による生計維持、家事はヘルパーに任せる、外食文化で料理をしない風習等が挙げられる。
　一方で、現在の課題は、日本以上の少子高齢化社会により、労働力減、周辺国とのコスト競争力や高付加価値による差別化の両面で負けてしまうという点。労働人口減少に対しては、他国の移民が建設現場を担っており、また国の政策として、高齢者の雇用促進や障がい者雇用に力を入れている。

　以上の他にもタイを取り巻く環境について詳しく説明して頂き、ＣＳＡと一緒に何かできればとのコメントも頂いた。

20：00～　お別れ夕食会

空港内でのお別れ夕食会

　バンコック市内の渋滞が酷く、予定通りの行動ができないため、全ての公式予定が終わると直接、スワナプーム空港に向った。空港でチェックイン後、荷物を預け、手荷物検査、出国手続きを済ませ、空港内のフードコートで「お別れ夕食会」をした。
　団長の仕切りで、メンバーはツアー全体について一言。「ＣＳＡの長年の活動が両国の政府の取り組みに深く入っていることがわかった」、「衣類が必用とされていることがわかった」、「必用としている衣類がわかったので、伝えたい」、「寮生が慎ましく生活し頑張ってるのがわかり、応援したいと思った」、「訪問先の流れがよかったので、理解が深まった」、「見たことを組織に伝えたい」等の意見が出された。

　メンバーは、無事に公式日程を終えることができた安堵感とともに７日間行動を共にした仲間との信頼感を胸に、ちょっぴり寂しさも…。

22：45　NK850　バンコク発 →

2017年１月21日(土)

06：40　羽田空港着

　メンバーは、無事に羽田に到着。入国審査、荷物を受け取り、名頭薗団長の解団宣言の後、別れを惜しみながら、帰路に着いた。

解団式

ビエンチャン市内のタート・ルアンで

ターディンデンタイ村小学校で

ラオス衣類保管倉庫で

コンケオ村小学校で

サンティパープ高校生寮の担当教師

タイ衣類保管倉庫への土産